

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話: 044-988-0004 (柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
 第64号

明治初年 柿生にも起きた 廃仏毀釈 (はいぶつきしゃく) 運動を考える(2)

◆廃仏毀釈とは◆
 明治元年(1885年)新政府が神仏分離令を出し、それまで神仏が一体であったものを切り離しました。そのため全国各地で「廃仏毀釈」運動が広がり多くの寺院や仏像が破壊されました。柿生でもその被害を受けた寺院があります。これらの動きの背景を考えます。

日本人が「仏」を受け入れた理由

前号最後では「神・仏はどんな関係にあったのか」というテーマで考えてみましたが、もう少しいろいろな角度からも考えてみたいと思います。

もともと日本人が信仰していた「神」というものがありながら、なぜ「仏」を受け入れたのでしょうか。整理してみましょう。

- ① 宗教として理論的にも確立していた「仏教」と、素朴な文化としての「原始信仰」とは質的に大きな違いがあり、対立する部分が少なかったということは前号でも述べました。
- ② 両者とも他を排斥する要素の強い一神教(キリスト教、イスラム教など)ではなく、多神教という共通要素が強かったということがあると思います。これは大変重要なことで、蘇我氏も対立した物部氏も「仏」は単純に蕃神(ぼんしん:外国から渡来した神)と考えていたようです。従って他国の神仏であっても自国の「神」として大切にすれば災害を防ぎ病気を治し、延命のために力を貸してくれるものと信じていました。
- ③ 皆さんも聞くことのある「帝釈天(たいしゃくてん)」「大黒天」「毘沙門天(びしゃもんてん)」などはもともとインド固有の神で、シャカが仏教を開いた後に仏教に取り入れられ、仏教を守る神と位置付けられました。従って、日本の神も同じような立場になるという考えも出てきました。
- ④ 仏教の伝来に関しては、受け入れ派、廃仏派の対立がありましたが、これは、政治的な権力争いという性格が強いと思われます。しかし仏教受け入れが大きな流れになると天皇家や各豪族とも神、仏のいずれか一方を排撃するという姿勢をあまりとりませんでした。



インドの神「帝釈天」

具体的にはどんな点で神仏が一体だったのでしょうか

- ① 奈良時代には、神仏習合思想(仏教と日本の神道が一体であるという考え)が広がり、神社の境内に「神宮寺(じんぐうじ)」という寺院が造られました。越前の国、氣比(けひ)神宮寺や若狭国若狭彦(わかさひこ)神宮寺が代表的なもので、平安時代にかけて全国的な広がりを見せました。あるいは、かつての川崎市中心部の日枝神社と大楽院、春日神社と常楽寺などの関係がそうでした。これは江戸時代以前に寺院が神社を管理することが多く、その寺院を別当寺(べつとうじ)といって神前で読経を行うなど神社の祭祀を仏式で行っていました。現在でも川崎市内でこのような名残りと考えられるような寺社が見られます。
- ② 平安時代には「日本の神様は、仏や菩薩が仮に神の姿で表れて人々を救済する」という「本地垂迹(ほんじすいじゃく)説」が盛んに唱えられるようになりました。
- ③ 朝廷でも国家の祈願が行われる場合には「神事」「仏事」の両様で行われました。
- ④ 三輪山や吉野山(共に奈良県)など日本独自の山岳信仰(“山”自体が神であるという信仰)と、中国の道教思想が合体して深山中で修業を積む風潮が生まれ、宗教者の山岳修行が盛んとなりました。7~8世紀にかけて登場した修験道の開祖といわれる「役小角(えんのおずぬ)」などはその代表的な人物です。やがて9世紀初め頃になると空海の「真言宗」、最澄の「天台宗」という山岳修行を重視する密教とのつながりを深めていきます。
- ⑤ 今でも神棚と仏壇の両方を置いて神仏をお祀り(まつり)する家庭が多く見られますが、これはその名残りでしょうか。

今日、お寺と神社ははっきりと分かれていますが、江戸時代までは神仏は大変近い関係にありました。お寺と神社が明確に切り離されたのは明治時代以降のことです。ならば、なぜ神・仏を分祀しなければならなかったのでしょうか。次号で考えてみたいと思います。(文:板倉)



宮内の春日神社(左)とその別当寺であった常楽寺

シリーズ

「麻生の歴史を探る」 第34話

麻生の鈴木家 ～熊野神社～

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

前項で私は小山田氏や稲毛氏と違い、地縁を持たぬ鈴木、亀井の一族が麻生の地を領した疑問を、朝廷からの恩賞の地、そして熊野信仰、とりわけ柿生の旧家に多い鈴木姓にかかわりがあるのではと述べました。

熊野信仰という紀州の熊野三山(仏を神の本地とする権現信仰)崇拝で、平安時代中期(1090年代)に始まりました。信仰は宮廷から庶民に及んで蟻の熊詣でも呼ばれましたが、信仰の伝搬者は故郷熊野を後にする武士たちでもあったようです。

前述したように麻生の鈴木、亀井の一族は紀州熊野の出で、その宗家(本家)は神武天皇から賜ったとする穂積姓でしたが、その後、那木(マキ科の高木樹)に鈴を結びつけ馬印としたことから鈴木姓となりました。代々紀州藤白(現在海南



鈴木家のルーツ熊野

市)に住し、氏神である藤白神社には現在も122代にわたる鈴木家系譜が残される

名族です。藤白神社の境内には「熊野一之宮」の大鳥居があつて、ここから熊野聖域が始まり、この藤白の鈴木一族が全国熊野信仰の中心であつたことを示しています。

現在麻生区内には13の神社がありますが、その中に熊野神社の名前はありません。それは明治39年の一村一社令で古社が合祀されたり、800～900年にも及ぶ歳月がこれを消滅させたからで、調べてみると過去には上麻生に2社、片平・古沢・万福寺・高石などに8社の熊野神社がありました。



藤白神社大鳥居

上麻生の熊野神社は一ヶ所は麻生の大ヶ谷戸鈴木一族の鎮守で、現柿生駅前サープラス柿生のところにあつました。もう一ヶ所は現山口台(公園)にあつた白山神社に熊野神社が祀られていたそうです(旧跡あり)。片平では現柿生小学校南、片平川の旧熊野堰の台地(寺台寄り)にその面影をとどめ、古沢は義経伝説の九郎明神社の東に今もその跡地を残しています。

一方、万福寺では現十二神社と思われまふ。熊野信仰は熊野三山で十二神を祀りますので、その別称と考えられます。前述の片平の熊野神社は十二社の末社といわれています。高石では現法雲寺前の森にあつたといひ、武蔵風土記には「第六天の小祠三祠あり、山腹の石段に一の鳥居、二の鳥居……」と古社であつたことが記されています。また、今は麻生区ではありませんが、もとは都筑郡下の上三輪には元慶元年(877年)創建とする熊野神社が今も存在しその歴史を秘めています。

ここでこれら熊野神社の分布を見て気付くことは、麻生区では麻生川周辺にあること、そしてこの地には鈴木姓の在家が多いことで、その旧家の数を見ると上麻生19家、万福寺10家、古沢7家など(柿生・岡上100年史)に上ります。その家紋は一致して熊野藤白神社の「下り藤(上り藤)」で、正しく武蔵麻生の鈴木家は紀州熊野一族であることを物語ります。そして前橋亀井六郎の館の主はこの一族の長ではと考えられるので、麻生に多い義経・弁慶伝説も真のものだとされてまいります。

なお付け加えますと、お隣町田市能ヶ谷の郷土史には「鎌倉時代、紀州から鈴木、神蔵、夏目の氏族が来住、この地に熊野神社を勧進した」とあるそうで、通常熊野神社は「熊野さま」とか「権現さま」とか呼びますが、上麻生月読神社の古祠には、熊野大権現の鳥居額と奥殿が大切に保存されています。



熊野大権現社奥殿

参考資料:「南海市史」「屋号と家紋」「麻生・岡上100年史」「ふるさと三輪」

シリーズ 黒船来航

開国秘話 (1)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆はじめに◆

ペリーの黒船の来航から開国にいたるいきさつについて、私たちは次のように教わってきました。「無能で無為無策の徳川幕府がペリーの強硬な軍事的圧力に屈し、極端に不平等な条約を押し付けられた。そのため明治政府は日本の独立維持と不平等条約の改正に、長きにわたって苦心に苦心を重ねざるを得なかった」と。この理解は正しいでしょうか。徳川幕府は本当に無能で無為無策だったのでしょうか。

寛政年間の終わりと共に始まる19世紀は、欧米列強の世界進出の加速による激しい戦争の時代でした。戦争に敗れた国々は勝利した国によって敗戦条約を押し付けられ、賠償金の支払いと領土の割譲に追い込まれました。徳川幕府を震撼させたアヘン戦争と、その敗戦条約である南京条約が好例です。より厳しい場合は条約を結ぶこともなく国家主権の全てを奪われ、植民地とされました。イギリス領インド、オランダ領インドネシアなどがこれにあたります。

考えてみてください。1853年のペリーの来航から1868年の明治維新まで15年あります。幕府が無能なら、この間に列強のどこかが日本に戦争を仕掛けて、植民地状態におくことができたはずですが。当時の日本にとって、仰ぎ見るような大国であったインドは植民地になり、中国(清)は半植民地状態に置かれたのに、日本は独立を守り通しています。明治維新後は、確かに明治政府の努力によるのですが、それまでの15年間は、明治政府によって無能呼ばわりされた徳川幕府が、必死の努力を続けて欧米列強につける隙を与えず、日本の主権を守り抜いたのです。この徳川幕府の努力は、素直に認められてしかるべきです。幕府が政策を誤れば、明治維新を迎える前に、日本は最低でも中国(清)と同じ状態になっていたに違いないのです。徳川幕府は決して無能ではなかったのです。

そうなんです。徳川幕府はアヘン戦争(1839~42年)を丁寧に分析して、欧米列強とは決して争わない方針を建てていたのです。そこから「異国船打ち払い令」を廃止して、「天保薪水(しんすい)令」を出し、欧米列強との貿易は拒絶するけれども、最低限の生活物資(水と食糧)の補給は認めて、列強との争いを避ける方針を明確にしていたのです。

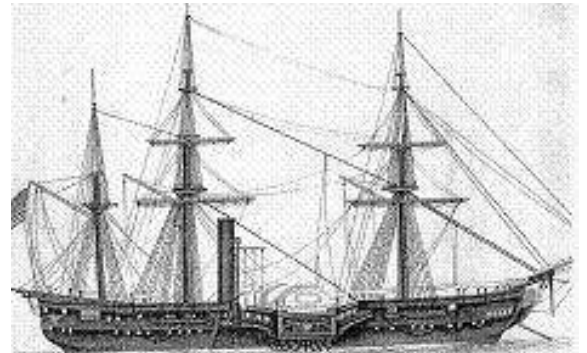
◆黒船の到来◆

ペリー指揮下の4艘の艦隊が三浦半島にやってきたのは、1853年7月8日(嘉永6年6月3日)のことでした。この日の江戸や三浦半島は、前夜からの土砂降りの雨は上がったものの、なお黒雲がたれこめ、蒸し暑く視界の悪い日だったと記録されています。この日浦賀水道に黒船が姿を現したのは午後5時頃と記録されていますから、まだ十分に明るい時間でした。

一般に4艘の黒船と言われますが、やってきたのはアメリカの東インド艦隊所属の蒸気船2艘(旗艦のサスケハナ号2450トンとミシシッピー号1692トン)に2艘の帆船でした。2艘の蒸気船も燃料節約のため、風があれば帆を張るのですが、この日は帆をまるめ、黒煙をあげて蒸気力のみで航行していました。2艘の帆船は帆を張って黒船を追っていたと記されています。徳川幕府を砲艦を用いずに威嚇する積りだったのでしょう。

黒船来航の報が浦賀奉行所に届くと直ちに厳戒体制が取られ、沿岸警備の川越・彦根・会津・忍の4藩は御用船に漁船を動員して4艘の艦隊を取り囲みました。沿岸警備隊がペリー艦隊を取り囲む中、浦賀奉行所の2人の役人を乗せた小船が艦隊に近付きました。与力の中島三郎助とオランダ語通詞の堀達之助です。堀は巨大な黒船に向かって「I can speak Dutch」「私はオランダ語が話せる」と大声で呼びかけました。何と、彼は英語で呼びかけたのです。これなら甲板上の水夫達も誤解することはありません。発砲の応酬は避けられて当然でした。水夫達からすぐに艦内に連絡が行き、ペリーの副官コンティとオランダ語通訳のポートマンが甲板に現れ、すぐに話し合いが始まりました。これが国交のない日米の初対面でした。

ここで、皆さんに考えていただきたいことがあります。何故長崎を遠く離れた三浦半島の浦賀に、オランダ語の通詞がいたのでしょうか。鎖国体制下の徳川幕府が、朝鮮、清(中国)、オランダに対して、開いた窓は長崎でした。ですから長崎には、中国語やオランダ語の通詞がおりました。しかし浦賀は長崎からは遠く、江戸に近い三浦半島に位置しているのです。



ミシシッピー号 出展『金海奇観』早大図書館蔵



カタカナは、ペリー側のつけた名称

(次号に続く)

上麻生日光台遺跡から鉄滓(てっさい=かす)出土

◆古代麻生では地元の砂鉄を使用して製鉄がおこなわれていたのか◆

平成21年から「古代柿生に製鉄の事実があったのか」というテーマで地質・水質・民俗・歴史・考古・伝承・地名・タタラ古代製鉄実験など種々の側面から考えてきました(「柿生文化」参照)。以前上麻生大ヶ谷戸遺跡で平安時代のタタラの羽口(炉に空気を送る口)が発掘されたり、時代ははっきりしませんが横浜市緑区鉄町の畑で鉄滓が発見されています。

今年上麻生の日光台遺跡の第5期発掘で鉄滓が発掘されました。この事実は古代麻生でタタラ製鉄が行われていたのではないかと高い確実性の高い証拠となりました。9月29日(日)のカルチャーセミナー(下記ご案内参照)で他の出土品とともに公開展示されますので是非ともご覧ください。

(文:板倉)



日光台遺跡から発掘された鉄滓

柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日:日曜日は土曜日、奇数月は偶数月

9月 8・15・22・29日(毎日曜日) 注:9月1日は休館 **10月** 5・12・19・26日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時~午後3時

柿生郷土史料館9~10月の催物ご案内

第4回 実物のミニ歴史資料展 「幕末海防への世論と発禁本」

主な展示資料 『戊戌夢物語(高野長英著)』『海外新話(嶺田楓江著)』『海国兵談(林子平著)』

内容 ・幕末、日本の庶民は中国で発生したアヘン戦争など海外事情を知っていたのか?

・これらの書物はなぜ発禁となったのか

公開日 **9月** 8・15・22・29日(毎日曜日) **10月** 5・12・19・26日(毎土曜日)

展示品解説 10月26日(土) 午前10時30分~11時30分

第43回 カルチャー・セミナー 「上麻生日光台遺跡と古代麻生の姿」

講師 浅賀 貴広氏 (盤古堂主任研究員・日光台遺跡発掘調査団)

日時 平成25年 9月29日(日曜日) 13時30分より

会場 柿生郷土史料館

内容 *5期にわたって発掘調査されてきた上麻生日光台遺跡の発掘調査結果が語る古代麻生の姿とは

*発掘された緑釉土器(りよくゆうどき=緑色の釉薬をかけて作られた土器)が語るものとは

出土品を
館内に展示!

第44回 カルチャー・セミナー 「鈴木さん」集まれ!麻生のルーツを探る(仮題)

講師 小島 一也氏 (柿生郷土史料館相談役・元川崎市議会議員)

日時 平成25年 11月24日(日曜日)13時30分より(予定)

会場 柿生郷土史料館

内容 鈴木さんのルーツを調べると、古代の姿が見えてくる

鈴木さんは、
いつどこから
来たのか

柿生郷土史料館の活動にご支援いただいている法人をご紹介します

☆☆☆柿生郷土史料館友の会法人会員(8月10日現在)☆☆☆☆

- ★月読神社 ★琴平神社 ★王禅寺 ★常安寺 ★浄慶寺 ★麻生総合病院 ★アルナ園 ★柿生恒産
- ★虹の里養護施設 ★フィッシュ・オン王禅寺 ★たま日吉台病院 ★川崎信用金庫柿生支店 ★大平屋
- ★かじのや ★志田電子製作所 ★朝日ホーム ★柿の実幼稚園 ★柿生保育園 ★山義産業 ★観財
- ★JAセレサ川崎 ★栄和 ★孝友商事 ★ゲオホールディングス ★リック設計企画 ★粕谷住宅資材
- ★青戸建材店 ★スズユウ商事 ★広東商事 ★ノジマNEW鶴川店 ★丸和企画印刷 ★プライマリー
- ★石野電気柿生店 ★とん鈴 ★尾作住宅 ★尾作材木店 ★奈良工業 ★北島工務店 ★麻生自動車
- ★ティーエムコーポレーション ★松屋 ★ガスト柿生店 ★小料理わかば ★レストランベル ★カラオケゆう
- ★リフォームイケダ ★志村建設 ★荒川電気工事 ★ゆりストア王禅寺店 ★誠和産業 ★三共エステート
- ★レストヴィラ王禅寺 ★菊川園 ★神奈川トヨタ自動車 ★花島商事 ★美容院ルシル ★サイトー農芸
- ★フラワーショップまきば ★栄運輸

(順不同・敬称略)